

## くも膜下出血は予防できます

筑波大学水戸地域医療教育センター/水戸協同病院

脳神経外科

遠藤 聖、柴田 靖

くも膜下出血とは、突然起こる激しい頭痛の代表的疾患で、大部分が脳動脈瘤という血管のコブが破けておこる病気です。高齢者に多いですが、若い人にも起きます。典型的には「突然ハンマーで頭を殴られたような」と表現されるような、これまでに経験したことがないほどの突然の激しい頭痛です。多くの方は初回出血で死亡あるいは重症後遺症を残すという怖い病気です。ごく最近も有名スポーツ選手がこれが原因で急逝されました。頭痛の他に吐き気・嘔吐や意識障害、麻痺症状などをきたすこともあります。



くも膜下出血の原因の大部分は脳血管の一部が風船のように膨らんだ脳動脈瘤が破裂することによるものです。発生頻度は年間人口 10 万人あたり 20 人前後で、一個だけでなく多発する場合もあり、やや女性に多い傾向があります。

発症の状況や脳神経学的検査、頭部 CT 検査などで大部分は診断されます。その後原因検索のためカテーテルを用いた脳血管撮影や最新型 CT 装置を使用した 3D-CTA を行い、脳動脈瘤の部位・形状などを確認します。(原因が脳動脈瘤以外のこともあります)

治療法として主に外科手術と血管内手術があります。手術の目的は第一に再出血(再破裂)を防ぐことにあります。手術は全身麻酔をかけ、開頭後、顕微鏡を使用して脳動脈瘤の頸部をクリップしたり(クリッピング)、動脈瘤を包み補強して、再出血を防止します。また血管内手術はカテーテルという細い管を動脈を通して、動脈瘤の中に細い金属を詰める方法です(コイリング)。それぞれの治療法には利点、欠点があり、患者、動脈瘤ごとに、治療方法を慎重に検討します。



これまで多くの脳動脈瘤はくも膜下出血を起こした後(破裂後)に発見され、治療されてきました。しかし最近では脳の精密検査(脳ドック)を受診することで、くも膜下出血を起こす前に脳動脈瘤(未破裂脳動脈瘤)を発見して、治療することが可能となってきています。日本脳ドック学会の調査では、未破裂脳動脈瘤は受診者の 2.7% に発見されています。脳ドックを受診することで予め未破裂脳動脈瘤を発見し、くも膜下出血を未然に防ぐ手段も発展しつつあります。未破裂脳動脈瘤の破裂する確率は部位や大きさによって異なります。未破裂脳動脈瘤が発見された場合には、脳動脈瘤の大きさ・部位・形態・年齢・全身合併症などを十分に考慮して、主治医とご本人の間で十分な理解と協力・相談の元に治療を決めます。

筑波大学水戸地域医療教育センター/水戸協同病院では複数の脳神経外科専門医で脳ドック結果を検討し、結果をお知らせします。動脈瘤が疑われた場合は最新式の血管造影や CT を使用して、詳細な検査を行い、必要であれば、根治術を行います。自分と家族のために、ぜひ本院の脳ドック受診をお勧めします。

詳細、お問い合わせは以下までお願いします。

水戸協同病院ホームページ 併設施設 健康管理センター

[http://www.mitokyodo-hp.jp/02\\_annai/02-02.html](http://www.mitokyodo-hp.jp/02_annai/02-02.html)

水戸協同病院 健康管理センター TEL 029-233-9930

